

二十 カルタ（小倉百人一首）

私は小倉百人一首のカルタが上手です。

中学時代、あるとき友人の本村清君を訪ねて行ったとき、大勢集まってカルタをとっていたのです。本村君が私にも加われというので加わったのですが、私はとり方を知りません。姉の友達がよく家に遊びに来てカルタを取っていたので門前の小僧、習わぬ経を読む式で、歌は大体知っていたのですが、とり方を知らないのです。それで本村君に教えてもらい、私の向側に座っていた女子の札をねらっていたのですが、とりそこなったのです。それで、ようしと思つて家に帰つて、一晚姉のカルタの本で勉強したのです。

あのカルタは上の句を読んで下の句を取るのですが、歌が決まっているので頭文字を一口言つたら取れる札、二口言つたら取れる札、三口言つたら取れる札というぐあいにちゃんと決まっています。例えば一口言つたら取れるのが七枚あるのです。む、す、め、ふ、さ、ほ、せ、とこれだけは一口言えばすぐ取れるのです。「さ」と一口言えば「いづこもおなじ秋の夕暮れ」という札が取れるのです。「寂しさに宿をたちいでてながむれば、いづこもおなじ秋の夕暮れ」です。「ほ」と一口言えば「ただありあけの月ぞ残れる」という札が取れるのです。「ほととぎす、鳴きつる方をながむれば、ただありあけの月ぞ残れる」です。こうして百枚の歌を何と言つたら取れる、何と言つたら取れると一晩勉強したのです。